様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24　年　5 月　25 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１３２００５０
研究課題名（和文）　能楽「型付」資料の全国的調査と、技芸伝承におけるその役割についての総合的研究
研究課題名（英文）　A national survey of Noh *katatsuke* materials, and comprehensive research on their role in the transmission of performance techniques
研究代表者
山中　玲子　（YAMANAKA　REIKO）
法政大学・能楽研究所・教授
研究者番号：60240058

研究成果の概要（和文）：各地に残る型付資料の内、大名家旧蔵や玄人の能役者の家に伝わったものなど、まとまった数量で残っている資料群の調査・撮影を終えた。また、能楽研究所で管理する般若窟文庫および鴻山文庫蔵の型付資料群について、収録曲目仮索引を作成・公開した。江戸時代初期の内容を持つ特徴的な古型付数種については、独特な用語の意味や記述方法を帰納的に解明し、そこに記されているいくつかの舞を演者の協力によって復元・公開した。

研究成果の概要（英文）：We carried out a national survey of *katatsuke* materials formerly transmitted in feudal domains or professional Noh families, and took digital photographs of most of them. We also drew up a tentative list, with appended title index, of *katatsuke* in the Kōzan Bunko and Hannyakutsu Bunko collections of the Noh Theatre Research Institute. A number of *katatsuke* dated to the early seventeenth century were examined closely for their terminology and formats, and the dance notations were decoded inductively. A number of dances were reconstructed for performance with the cooperation of Noh performers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2012 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
総　計	8,500,000	2,550,000	11,050,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：型付・所作・能・能楽資料

１．研究開始当初の背景

能は、室町期にその基盤が確立して以来650 年間一度も途切れることなく上演され伝承され続けてきた。その技芸の伝承は口伝によることも多いが、具体的な演出は、舞台上で実際にどう動くかを記す「型付」に記録され、現代にまで伝えられている。各流の家元や代々続く役者の家だけでなく、全国各地に、大名家旧蔵のもの、諸藩の役者の手控え、素人用に書かれたと思われるものなど、膨大な

型付資料が残されている。だが、従来は、型付の記述の一部や奥書を作品研究・演出研究・役者の事跡研究等の補助資料として使うことはあっても、型付という文献資料そのものの性格や伝播の様態、能楽の歴史の中で型付が果たした役割等の検証は十分におこなわれてこなかった。

能楽研究所を中心とした研究グループは、「中世から近世・近代にいたる都市と能楽の関係についての総合的研究」(科学研究費補助金基盤（B）、平成 11～14 年度。研究代表者、表章)、「地方諸藩の能楽資料に基づく、都市と能楽の関係についての総合的研究」(同、平成 17～20 年度、研究代表者、山中玲子)等の研究により、現代演じられている能の技法が中央の権力者から地方の大名へと伝播し、各地では都市を中心に大名からその家臣団へと広がっていく様相を資料によって跡づけてきたが、伝播・拡大の過程で能の技芸の骨格が崩れることなく継承され得たのは、実際にどう演ずるかを伝える「型付」の用語や記述法が確立していたからでもある。そこで、「型付」の記述法や伝承形態を精査することにより、演じられるそばから消えて行く身体芸能としての能の技法がどのように書き留められ伝えられてきたのかを明らかにするために、本研究が計画された。

２．研究の目的

本研究には下記のとおり、方向の異なる二つの目的があった。

（１）全国各地に数多く残る能の「型付」資料を広く調査・収集し、使いやすい形で公開するとともに、能が全国各地へ浸透していった様相を、役者の交流や催しの記録からだけでなく「型付」の伝播の面からも追究する。

（２）無形文化財である能の芸を伝えていくために編み出された「型付」独特の用語の成立事情や変遷、その解読のために共有されていた「暗黙知」の部分を解明し、従来専門の役者でなければ解読が難しいとされてきた「型付」を研究資料として活用する方法を確立する。

３．研究の方法

上記二つの目的を遂行するため、本研究の方法も、（１）全国各地に残る能楽型付資料の文献調査・収集と分析、（２）能楽型付の記述法・解読法の解明、という二つの異なる側面を持つ。

（１）全国各地に残る能楽型付資料の文献調査・収集と分析

従来からおこなわれている全国の能楽資料の体系的調査に通じるものであり、特に平成 17～20 年度に科学研究費（基盤Ｂ）の助成を受けておこなった「地方諸藩の能楽資料に基づく、都市と能楽の関係についての総合的研究」を発展的に継承するものである。

①全国の文献資料所蔵機関の情報を集め、能楽型付資料の所蔵の有無を確認、能楽資料がある場合にはその全体像を把握しつつ、重要な型付資料を撮影・収集した。
②収集した各資料について、既に公開されている諸型付との照合や資料相互の比較により、その系統と記述法の特徴を解明することをめざした。流儀・時代・被相伝者等による差違や、逆にどのような場合にも共通する型付の基本様式等を探っていった。

（２）型付の記述法・解読法の解明

輪読形式の研究会を起ち上げると同時に、研究者との共同作業に理解があり一定の実績のある能役者の協力も得、以下のような方法で進めていった。

①江戸時代初期の古い型付のうち、特徴的な数種を選び、研究会において翻刻とその内容の吟味を進め、用語や記述法などを帰納的に解明する。
②我々が可能な限り解読した箇所を、研究に理解のある能役者に実際に演じてもらい、なぜそう動くのか、代々の教えのような根拠があればそれを、あるいは根拠がなくてもそうしか動けないという場合は、その「役者の生理」がどのようなものかをできる限り聞き取り集成する。
③謡の文句を引用しそこでどのような所作を演ずるかを書き留める古型付の記述は省略・挿入・傍注等が多く、単純に翻刻するだけでは理解しにくいため、実際にどのように演じられているかを判りやすく示すための書式や現行演出と対応させての表記等についても討議を重ねる。

４．研究成果

（１）型付資料の調査・収集

各地に残るまとまった型付資料のうち、未調査だった下記の諸資料を調査し、必要に応じて撮影・複写してデータを収集した。

①神戸女子大学蔵「能覚書」、同大学古典芸能研究センター蔵「塩小路光貫写仕舞付」。観世流の能演出に大変革をもたらし多くの小書演出も創出した観世元章系統のまとまった型付で、替演出の記述も多い。ま

た、元章独特の型付記号の凡例が注記されており、他の同系統の型付を解読するのに有益である。

②龍谷大学大宮図書館蔵「金剛流宝暦十三年野村三次郎識語型付入り謡本」「金剛流秘書習事聞書」等。金剛流の習事に関する由緒正しい聞書と、年代・著者の判る型付であり、上杉家に伝わった大量の金剛流型付群との比較検討にも有益である。

③盛岡市民公民館蔵南部藩旧蔵能楽資料（主として宝生流）、東北大学付属図書館蔵宝生流能楽型付資料、同図書館蔵秋田城介筆金春流型付資料、山口県防府市毛利博物館蔵の能楽伝書類、金沢市立玉川図書館近世史料館（加越能文庫・藤本文庫）および前田土佐守家資料館所蔵の前田家関係能楽資料（金春流・宝生流）、熊本大学図書館寄託「永青文庫」所蔵の細川家伝来能楽資料（金春流・喜多流）等。旧大名家に伝わった型付その他の能楽演出資料の特徴を把握するための調査・撮影である。

④ほかに、江戸時代中期頃のものと思われる宝生流と喜多流の型付、幕末から明治期にかけての喜多流の能楽伝書及び型付類等、新たに市場に出た型付資料のうち貴重と思われるものを購入し、現在調査継続中である。

これら厖大な数の型付類は、元禄時代頃を境にそれ以降はほぼその書式を確定し、用語も記述から復元できる舞台上の演出も、現行と大きくは変わらないことが判明した。地域が異なっても同じ書式の型付が残されている。流儀による演出の差はもちろん存在するが、型付の用語自体にほとんど差はなく、特に謡に合わせて舞う部分の型付は一見しただけでは（奥書や伝来等、他の情報の助けを借りなければ）流儀の確定ができないほどである。囃子の付の場合、諸藩に仕えた家の違いが同じ流派内にもあって付の記述法が一定しないのとは、あきらかに異なっている。江戸時代初期型付の解読の困難さに比べても驚くべき変化である。元禄期前後に能の型付用語が急速にかつ意識的に、整理・統一されていったのではないかと思われ、その点の調査が今後の大きな課題となる。

（２）収集・撮影済み資料の分析

（１）での調査とは別に、すでに能楽研究所で収集・撮影済みの型付資料について、フィルム整理・紙焼作成・内容分析等をおこなった。

①奈良県天河神社宮司柿坂家文書群の撮影フィルムから型付資料を選び出したうえで整理し紙焼きを作成。内容の分析をおこなった結果、喜多流の役者により伝えられた型付であることが明らかになった。

②能楽研究所、鴻山文庫、般若窟文庫所蔵の未整理の型付資料について、すでに調査済みの型付類との比較調査をおこない、流儀・時代の確定を進めている。能楽研究所新収資料についての作業は未だ完了していないが、鴻山文庫蔵型付については、『鴻山文庫　解題目録 下』（近日刊行）に成果がまとめられており、また、般若窟文庫および鴻山文庫蔵の型付資料に関しては、収録曲目の仮索引を作成し既に公開している（５「主な発表論文等」参照）。

（３）江戸時代初期型付の翻刻・分析

①東北大学付属図書館蔵『秋田城介型付』を輪読する研究会で、同型付資料の翻刻と内容分析を進めた。同資料は慶長年間に下間少進によって編まれた金春流のまとまった型付である『童舞抄』と非常に深い関係がある。秋田城介は下間少進から『童舞抄』を相伝されており、少進から実際に稽古を受けて習った型を本資料に記す際、『童舞抄』に示された型との違いなども書き込んでいる。非常に詳細な記述を丁寧に分析することで、当時の演出のバリエーションが整理できるわけだが、それだけでなく、『童舞抄』のような大部の型付伝授と実際の稽古の前後関係など、今まであまり注目されて来なかった問題も浮かび上がってきた。こうした点については今後も調査・考察を継続していく。

②上掛リの古型付である『宗節仕舞付』『岡家本江戸初期能型付』についても用語調査をおこない、各資料に独自の用語の意味や記述の背後にあるルール等の解明を進めた。特に古い時代の『宗節仕舞付』では、現在よりもはるかに写実的な所作が確認でき、また、「見る」所作の多用によって情景を表わす能独特の手法も明らかになった。省略が多く記述が恣意的で正確な理解が難しいと思われていた古型付の記述が予想以上に厳密なルールに則っていることも判ってきた。「ひらく・出る・廻る」等々の一般的な動詞を用いてはいるが、ちょうど特定の語と語に強い連語関係(collocation)があるように、特定の所作と所作の強い結びつきがあり、また、同じ一連の動きはまったく別の曲でも同じ所

作の連なりで表現されている。古型付の言葉は従来考えられていた以上に「型付用語」として整えられているのだと考えられる。

③型付の書式は謡の引用と型の記述が交互に出てくる特殊なスタイルであり、傍注や挿入等を非常に多い。複雑な記述スタイルの型付記事を効率的にデジタル化し、しかも現行演出とも比較検討がしやすいような書式についてもモデルを作成・発表した。

（４）古型付資料に基づく実演の収録

①記述に省略の多い古型付『宗節仕舞付』から能〈源氏供養〉のクセ部分を抜き出し、能役者にその記述通りに舞ってもらい、記述がない部分をどう解釈しどうつないだか、またその際の基準となる、能を舞うときのきまり（ある一つの動きの後にはどのような動きが続く場合が多いか、絶対にあり得ない所作のつながりはどんなものか、型付に書かれていなくてもある所作をおこなう場合にその前後に必ずおこなわれる所作があるか等々）を聞き取った。復元した舞の実演やその説明はすべてビデオで記録し、検討材料としている。

②『岡家本江戸初期能型付』からは能〈桜川〉のクセ部分を抜き出し、(３)の②でおこなった用語の解読・分析の結果に基づいて3DCG による復元をし、「能楽学会世阿弥忌セミナー」(2011 年 8 月 8 日奈良国立博物館講堂)にて発表するとともに、成果報告用ウェブで公開した。

③上記①②の成果を踏まえ『秋田城介型付』から〈千手〉〈自然居士〉の曲舞部分、〈田村〉〈山姥〉終曲部の表意的な舞の部分を選んで復元した。復元にあたっては能役者とも討議を重ね、その成果は能楽学会東京例会において、ワークショップの形で一般に公開した。

資料に記述されていない部分をどう埋めていくか、多数の例を検討した上でもっとも合理的な形に復元したつもりではあるが、書かれていない部分は最終的には推測するしかない。能楽学会例会での発表ではその点についての批判もあった。だが、これらの復元は復元の結果に芸術的な価値があるのではなく、むしろ復元過程で生じるさまざまな問題点が能型付をめぐる新しい視点を与えてくれ点に意義があると考えている。現代の能の常識とは明らかに異なる動きが記されていることもあり、そのような動きが江戸時代中期までの間にどのように現代と同じような形に整理・統一されていったのかを追求するのも今後の課題の一つである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

①中司由起子、江戸初期型付に基づく実験的復元、能楽研究、37 号、2013、11-47、無

②山中玲子、所作単元デジタルデータベースと演技合成ツールの試み、能と狂言、10 号、2012、有

③山中玲子、〈老松〉の小書「紅梅殿」の諸相と意義、能楽研究、36 号、2012、1-27、無

④宮本圭造、戦国期能伝書の伝来をめぐる一考察—『聞書色々』と『細川十部伝書』—、能楽研究、35 号、2011、1-97、無

⑤中司由起子、型付における「回ル」—能楽型付の記述ルールの研究（２）、能楽研究、35 号、2011、164-180、有

⑥山中玲子・深澤希望、鴻山文庫・般若窟文庫蔵能型付一覧および収録曲仮索引、能楽研究、2011、181-204、無

⑦山中玲子、能楽型付の記述ルールの研究（１）、能楽研究、34 号、2010、69-94、無

〔学会発表〕（計４件）

①中司由起子、江戸初期型付に基づく実験的復元、能楽学会東京例会、2012 年 11 月 15 日、銕仙会能楽研修所

②山中玲子、所作単元デジタルデータベースと演技合成ツールの試み、能楽学会世阿弥忌セミナー、2011 年 8 月 8 日、奈良国立博物館講堂

③山中玲子、能の所作の特徴を考える、 国際日本学シンポジウム「人体と身体性」、2009 年 11 月 2 日、アルザス欧州日本学研究所、フランス

〔図書〕（計２件）

①山中玲子（共著）Enacting Culture: Japanese Theater in Historical and Modern Contexts, Indicium Verlag, 2012, 27-36 (世阿弥時代の能の演技 Performing Nō in Zeami's Time)

②山中玲子（共著）、国際日本学研究叢書 13『人体と身体性』、2010、153-172（能の所作の特徴を考える）

〔その他〕

ホームページ等

http://hitec.i.hosei.ac.jp/nohken_shosa/

６．研究組織

(1)研究代表者

山中　玲子（YAMANAKA REIKO）
法政大学・能楽研究所・教授
研究者番号：60240058

(2)研究分担者

宮本　圭造（MIYAMOTO KEIZO）
法政大学・能楽研究所・教授
研究者番号：70360253

伊海　孝充（IKAI TAKAMITSU）
法政大学・文学部・准教授
研究者番号：30409354

小林　健二（KOBAYASHI KENJI）
国文学研究資料館・文学資源研究系・教授
研究者番号：70141992

(3)連携研究者

小秋元　段(KOAKIMOTO DAN)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：30281554

(4)研究協力者

中司　由起子(NAKATSUKA YUKIKO)
法政大学・能楽研究所・兼任所員
研究者番号：90624130